

# 淨土

1992-12

昭和十年五月二十日  
昭和二十四年四月二十八日  
平成四年十一月二十五日印刷  
第五十八卷

十二月号

第三五五号  
平成四年十二月一日發行



“下生”





## 十二月の秀句

臘八の明方頃を鴉啼く  
末法の星美しき成道会  
老僧のだよだよ話臘八会

小川 煙村  
今村 霞外  
星野 立子

# 十二月号



罪は十悪五逆のもの、なおむまると信じて、小罪をもをかさじと思べし。

『つねに仰せられける御詞』

## 目次

### にこにこ法話

今一番大事なこと ..... 長谷川 岱 潤.....(2)

### 《特別寄稿》

竹中信常、結城令聞両先生と ..... 築 地 泰 賢.....(9)  
藤井実應上人を偲ぶ

### 童話・どうわ

夏 ..... 今 井 康 隆.....(13)

### 《読者のページ》

法然上人行状図は ..... 河 住 玄.....(22)  
やはり勅修であるの説 (下)

“維持会員”へのご加入のお願い ..... (8)

### 季語やぶにらみ 29

..... 木 下 隆 一 ..... (26)  
平成4年、自然界の異変

表紙絵 小林治郎画

## 今一番大事なこと



長谷川 岱潤

(東京・品川区戒法寺住職)

おじいちゃんの月命日である十三日、いつものようにミーちゃんは、お父さんとお墓参りをしていました。

「前から気になっていただけだよ。お墓参りの時って、何で必ずお水をお墓にかけるのかなあ。夏なら暑そうだからって気持ちもわかるけどさ。今日なんか寒

いじゃない。こんな日お水かけたら、おじいちゃんかわいそうだよ」

「そうか、かわいそうか、ミーちゃんは優しいねえ。でもね暑そうだから、寒そうだからってかけるんじゃないと思うよ」

「じゃあ、なぜ。なんか理由があるの」

「実はね、お父さんもよくわからなくて、

前からずっと気にしていたんだ。だって、よくあれはお墓を洗っているんだよって言う人がいるんだけれど。どうもそれだけじゃないような気がするんだ。洗うだけなら最初の人でしたら、それでもいいわけで、お参りする人全員が水をかける必要なんてないはずなのに、どうもお檀家さんがお参りするところを見ていると、お参りの一作法として、水をかけているように思えるんだよね。だから水をかけることがお墓参りの一作法としてどういう意味を持つのか、ずっと考えていたんだ」

「それで何かわかった」

「そうだね、一応三つのことが考えられ

ると思うんだ」

「三つあるの？」

「一つは、いろいろな宗教に共通する考え方として、水には清める力があると信じられていたからかけるのだという考え方。ほらよく川に入って水をかぶって禊みそぎをするなんて言うじゃない。あれ水垢離みずかきとも言うんだけど、密教系のお坊さんや神社の神主さんがよくやっているよね。つまり、お墓を清めるということ。これが第一だね」

「次は」

「二つ目は、お父さんが考えたんだけど、お墓に水をかけるといっても、なぜか木の墓標のお墓にはかけないみたいなんだよね。つまり石の墓標のお墓だけに

水をかけているみたいなんだ。そこで思うんだけど、昔の石のお墓は今のような御影とか小松などといった高価な石ではなかったでしょ。また石工の道具も限られていたせいとか、お墓に掘る文字も今のようにくっきりと読み取れるものではなかったんだ。灰色の石に細く掘った文字は石が乾いているとまったく読み取れないじゃない。だからお水をかけて文字を浮き出し、お戒名をお唱えしてお参りしたと思うんだ。つまり、墓相をはっきりさせるために水をかけるんだね。これが第二だよ」

「それじゃ最後は」

「今までの二つは言ってみれば、石と水との関係で、儀礼的な面と考えていいと

思うんだけど。最後の三つ目は、お経の中にどういうふうに書かれているかってこと。つまり心の問題だね。それでお経を読むと、お墓にお水をかけることは餓鬼供養だって書いてあるんだ。わたしたちの目には見えないけど、飢えた鬼、餓鬼が存在するって、お施餓鬼の供養の時いつもお話するよね」

「ああ、お施餓鬼の時の餓鬼ね」

「そうそう。その餓鬼はお参りの時のお墓にかけた水だけが、飲むことができるのだって書いてあるんだよ」

「それじゃ、お墓参りの時、お施餓鬼をしているってこと」

「そういうこと。お施餓鬼のときいつもお話しているように、ご先祖や亡き方は

今お浄土に行つて、仏様のお弟子になつていらつしやるのだから、私たちが生きてゐる時にしてあげたことと同じことをやつても、喜びが半分であるんだよ。ちやうどミーちゃんがお父さんのために、お父さんの好物を買つてくれるよりも、お父さんはミーちゃんが世の中の人のために、いいことをしてお手伝ひしてくれた時のほうが何倍も嬉しいように、お浄土のおじいちゃんは、おじいちゃんのためにお参りすることと同時に、ミーちゃんがいい子になることを誓ひ、そしてなおかつ目に見えない餓鬼たちも救つてあげようという広い施しの心を持つてくれることが、一番うれしい供養なんだよ」

「お施餓鬼は、そんなに大事なことのなの」

「そうだよ。ミーちゃんがお墓にお水をかけてあげて、そのお水を餓鬼たちが飲むことができたなら、お浄土のおじいちゃんもきっと喜んでくれると思うよ」

「それしや、私、お水たっぷりかけてあげて餓鬼さんに飲ませてあげるわ」

「そうだね。お父さんは仏様の教えの中で一番大事なことは、そうした広い施しの心を持つということと、私たちが餓鬼にならない、少欲知足の教えを守る生活だと思つてゐるんだ」

「少欲知足つてなあに」

「欲を少なくして、足りるを知ること。」

「言つても難しいか。つまり、必要以上に食べない。必要以上に欲しがらない。」

「必要以上に快適さを求めない。必要以上

に樂を求めない。必要以上に」

「ええ、まだ続くの」

「もういいか。要するにガツガツすることなく、ほどほどを考えることだよ」

「でもさ、ふつうはもっとよりよい生活をとかさ、もっと樂にとかって言ってるんじゃないの」

「もっと、もっとか。でもねそういう欲望をふくらませてゆく世界は、仏様とは正反対の世界だよ。喉が乾いたとき、水を飲んで満足していられるのはほんの少しで、すぐに氷入りの水が欲しくなり、次にはジュースだ、いや次は熱いお茶だと、欲望はふくらむばかりだろう。この世の中で欲望を満たすことを求めて行ったら、永遠に満たされないと説くのが仏

様だよ。欲望が満たされなければ私たちは

幸せになれないのだったら、私たちは永遠に幸せになくなってしまふ。そうではなくまず私たちが、少欲知足の生活を実践することが、幸せになる一番だと気がつくことなんだよ」

「ほどほどが幸せかあ」

「そう。そして、広い施しの心を実践するともっと幸せになるんだって」

「でもさ、そういうことって一人が始めても馬鹿みたいじゃない」

「それは間違いだよ。一人が始めなかったら何にも始まらないよ。宮崎県の幸島の猿の話知ってる」

「知らない。猿がどうしたの」

「ある日一頭の猿が、芋を海に落として

しまったとき、それを食べたらいよいよ食ったので、それ以来芋を海水で洗って食べていると、やがて数匹がまねをしだし、あつという間に島全体の猿が芋を洗って食べるようになったそうさ。そうしたらそんなことを全然知らないはずの大分県の高崎山の猿も、芋を洗って食べるようになったというんだ。これはシンクロニシティと言って、同族同士は目に見えないネットワークで、結ばれているっていうことなんだそうさ。これは我々人間にだって言えることなんだそうだよ」

「シンクロニシティ。なんだそれ」

「日本語では共時性と言うんだそうさ。」

お父さんもよくわからないけれど、同じ考えのものが同族同士ではある一定の数

を越えると、爆発的に数が増えるんだそうなんだ。芋を洗う幸島の猿だって、初めは一頭だったんだよ。少欲知足や施しの心が幸せをつかむ秘けつだってこれだって、我々が強く心に思っていれば、やがて日本中に広まることだって夢じゃないさ。そしてもし日本中にこの教えが広まれば、二十一世紀の日本も夢じゃないさ。でももしそうでなかったら、二十一世紀に日本が生きてのびているかどうかさ疑問だよな」

「地球がだめになってしまうってことか。」

少欲知足や施しの心が、今の我々に一番大事だってことだね」

「それがお浄土のメッセージだよ」

「仏様ってすごいや」

◎「維持会員」へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十八巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

《特別寄稿》

竹中信常、結城令聞両先生と  
井実應上人を偲ぶ

築<sup>つき</sup>地<sup>じ</sup>泰<sup>たい</sup>賢<sup>けん</sup>

築地本願寺では毎月土曜日に仏教文化講演会が催された。聴聞したのは戦後故郷より再上京、昭和二十一年以降であった。会場は京橋中山太陽堂から銀座日出堂時計店ビル、築地本願寺へと移された。その他神田一ツ橋の

如水会館では朝比奈宗源老師による無門関が、谷中の天龍院に於いては碧巖録の御提唱が行われた。芝神谷町（西本願寺派光明寺）の蝸牛会では結城令聞先生（平成四年八月二十八日姫路市姫路病院で御遷化90歳）の教行信証その他の御講義がなされた。

昭和五十三年藤井実應上人（平成四年九月三日知恩院に於いて御遷化93歳）が、大本山増上寺に御晋山され、昭和五十七年迄約五年間上人の声談に接する事を得た。毎月七日に縁山会、二十四日に増上寺の別時会に際して御法話を聴聞する事が出来た。昭和六十一年長野県上諏訪の唐沢山阿弥陀寺で籠山念仏をなし得たのも上人の影響によるもの。

竹中信常先生（平成四年六月十一日聖路加病院にて御遷化79歳）の御法話に接したのは仏教文化講演が築地本願寺に移された頃で、時には先生より直接お知らせを受ける事もあった。昭和六十一年七月、唐沢山阿弥陀寺の籠山念仏をひかえての御法話に、山崎弁栄上人の念仏にもふれられた。念仏は見仏を目的

にするか否かについてである。一つの暗示を与えられた。

結城令聞先生の教行信証を学ぶようになったのは昭和三十年過ぎであった。仏教文化講演会が銀座日本堂ビルに移された頃であった。教行信証、浄土和讃、歎異抄、一念多念文意、唯信抄文意と続いた。その間に教行信証（岩波文庫）の通読をくり返した。巻末に記録することになれば百余回に及んだ。通勤電車の中でもよく読んだ。中学生の頃法然上人の御伝（勅修御伝）を拝読したのも通学電車の中であつた。最も精神が集中するようである。

お念仏が明るく申せるようになった。

昭和三十四年伊勢湾台風之夜であつた。一念多念文意が講ぜられた。本書は親鸞聖人八

十五歳の述作で、隆寛の「一念多念分別事」につき、その要素をひいて注釈を試み、田余の人々にも解りやすくという事であった。

恒願一切臨終時 勝縁勝境悉現前

善導の「往生礼讃偈」の文を隆寛が引用したもの。

この夜以来念仏が明るく申されるようになった。外祖父母の南無妙法蓮華経と打ちならす太鼓の音のように。南無妙法蓮華経との出遇は私の幼年の頃であった。祖父母が何故に法華経の信仰に入ったかは不明である。

あの台風の中に親鸞聖人の声が響いてきたのである。発願文の中に椎尾弁匡先生のお声を聞いたのは、それから一ヶ月後のことである。

私が郷里（長崎県南松浦郡若松村）を出たのは昭和三年二月であった。「増上寺参拝の時は大きな声で念仏申せよ」とは、師のはなむけの言葉であった。上京後増上寺に参拝する機会がしばしばあった。

道重信教上人の御法主の時代である。その頃渡辺海旭先生の阿弥陀経のお話を聞くことが出来た。山内を散策される先生の後姿を忘れる事が出来ない。

昭和十年頃であったか、シルバン・レヴィ先生の追悼法要が行われた。高楠順次郎先生のお言葉が印象に残る。「レヴィ先生は東洋と西洋との文化の橋わたしをされた」と。

増上寺の別時念仏会には椎尾弁匡上人の頃より参加させて頂いた。青山梅窓院の中島先

生、赤坂浄土寺の阿川先生の後について。

大野法道上人、藤井実應上人、中村康隆上人と大本山増上寺の御法主は続いたが、御別時参詣は変る事がなかった。

歴代の御法主の中では藤井上人の御法話に接する機会が最も多く、善導大師千三百年の御遠忌（昭和五十四年）をひかえて大師の御法話に関する法話、続いて選択集が講じられた。最後の講義を終えられたのが昭和五十七年、浄土門主、第八十五世知恩院門跡になられて東京御出発の朝であった。東京駅まで御見送りする事が出来なかったのは、甚だ残念であった。その頃大橋英正師が増上寺在勤の時で大橋師の席にはしばしば顔を出した。「天下和順」の藤井上人の御染筆を頂いた。故郷

出発の前夜、師の入江泰禪より与えられた選択本願念佛集版本二冊を保管願った時である。

青蓮華 白井成充先生

招喚の声 昭和三十九年一月詠

業風吹いて止まざれども

唯聞く弥陀招喚の声

声は西方より来りて

身をめぐり髓を徹る

慶ばしきかな身は娑婆にありて

既に浄土の光耀を蒙る

あはれあはれ十方の同胞

同じく声を聞いて皆俱に一処に会せん

南無阿弥陀仏

# 夏



今<sup>いの</sup>

井<sup>い</sup>

康<sup>やす</sup>

隆<sup>たか</sup>

(幸手市清光院住職)

「ちよつと外でまつてろ」

学校から、カバン持ちをしてきたヨシオは、武男の家の納屋<sup>ナヤ</sup>あたりで額の汗をぬぐった。

大股<sup>マタ</sup>で、土間<sup>ドマ</sup>に入った武男は、うす暗く、誰もいない畳の所までカバンをほおりなげ、土間の奥の勝手場に行き、母が用意しておいたザルの中のサツマイモを二つつかんだ。

土間から外に出る前に、ちらっと上をおおぎ、戦死した父の写真に目をやった。電気もついていない、暗い、玄間先の部屋だが、鴨居カモイの上に、父の軍帽姿が見える。

「ほお、くえやあ、おめえも」

見あげるばかりの武男から、ふかしたサツマイモをもらうと、ヨシオは大将の武男のあとを追った。

武男の母は、今ごろ、近くの親戚の家でまかないなどをしている。昼どきに家に帰って、腹へらしの一人息子にイモを届けておいたのだ。夕方までは帰ってこない母だ、いつものように、武男は日暮まで、十人あまりの子分どもと過ごす。

人一倍、背が高く、胸の張った武男は六年生でも、すでに大人の骨ぐみをしている。一人っ子で、のんびりした性格だが、腕力で武男にかなうものはなく、中学にはいった先輩大将のあとに、すんなりおさまったのだ。

七月も、もう夏休みに入ろうとする暑い日、武男とヨシオは、皆が集まってくる神社へ向って歩き出した。太陽は、二人の頭上を真上からてりつけている。

「あちいなあ、ヨシオ、イモあうめえかあ」

「おめえんちも、おとうはいなかったなあ」「死んだんじゃねえんです、どっかにいるんだ」

「うまいです、大将のうちはいいなあ、かあちゃんがイモふかしておくなんてさあ」

「おめえ、おとうの顔、おほえてつかあ」

「おほえてつけど、思い出したくねえ」

「ああ、わるかったなあ、思い出さして、おらあよお、おらあちは、俺が赤んぼのころだからよお、とうちやん死んだのさあ」

武男の家から十分も歩くと、香取さまについた。カドリ裏手に、もう何人か仲間が来ていて、高ん馬をしている。腰を曲げているタツオの上に、三人目の子がとび乗る所だ。

「オーツ、もうやめろ、今日はすげえあちいから、川へ行かねえかあ。そんじゃねえと、馬に俺が乗んどお」

「わあ、大将に乗られたら、たまんねえや」

どっと、笑いがおこり、皆は川へ向って歩き出した。お宮の前を少し行くと、古川が流れていて、川舟の舟着き場がよく行く川遊び場だ。肩ほどもものびた夏草の向うで、も

う何人かの声が聞こえてくる。

土手をのほり、草を分け、細い道をおりると、板張りの幅のせまい舟着き場が、川につきでている。あたりには、川舟は見あたらず何人かの子供たちが、パンツ姿で川にとびこんだりして遊んでいる。

「おい、てめえらあ、どけどけ、本村の大将のおとおりだあ」

「おらほうの大将は、五年の田村先生だつて、スモウでまかしたんだと」

ヒロシや、タツオが大声でどなると、となりの字の子供たちが、いそいで土手に上り、舟着き場をあけわたした。川で泳いでいる二三人も、水から上ったが帰るつもりはない。去年の大将と違って、武男は、あまり悪さをしないことを皆が知っていた。彼らは、少し川下の砂べりで、又、泳ぎはじめた。

ザブーン、ドーン、ドーン、ザブーン

武男の仲間は、皆パンツ一枚になると舟着場の上からとびこみ、歓声をあげながらは

しゃぐ。もぐったり、ふざけあったり、杭をよじのぼって舟着場に上っては、又、とびこんだり、大さわぎだ。

男は、クロールのような泳ぎで川の中ほどまでゆき、ゆっくりもどってきた。

「あー、つめたかったあ、あっちのほうは川底のほうに冷てえ水が流れてっから氣をつけろー、おめえらあ」

「ありや、水みちかも知んねえなあ」

太陽がまだ頭上にある、暑いさかりの古川べりで、武男たちの川あそびはつづいた。水ぎわの草の影をオハグロトンボが三匹ほどとびかい、わずかに川風が上から下に吹いている。青空には、白い雲がゆっくり移動しているが、太陽をさえぎるほどではなかった。

「そろそろ、あがんばやー、カップが出つといけねえかなあ」

武男の冗談で、皆はどつと笑い、まだ泳ぎたらない者も、しかたなく水から上った。半ズボンをはいたり、ランニングを着ている間に、ぬれた衣服が暑さで乾きはじめるほど陽ざしが強い川の水でツルツルになった顔や腕に、もう汗がふきだした者もいる。

「あちいなあー」

「すげえ、あちい日だなあー、今日は」

「腹もへったし、のどもかわいた、あー、何かくいてえなあ」

「このへんには、何もねえどお、キウリでもみつけてくうかあ」

皆は少しだるくなった足どりで土手をのほり、土手づたいに歩きながら畑をさがした。少しはなれた所に畑が見つかり、皆で近づくと、おい繁る葉の影でキウリがいくつも顔を出している。熟れすぎて太く曲ったのがゴロゴロしていて、ツルの先に咲く黄色い花が陽をあびている。あたりは見はらしのいい平地で、誰も見てはいないようだ。

「あー、こうあつい時は、生っキウリもうまいなあ」

武男はズボンで一つこすってから、かじりだした。皆も、二本くらいもぎって畑から出ようとした、その時、ふいに野ら道を自転車<sup>ママチャリ</sup>が近づいてくる。学校の門のそばのクニオだ。クニオは、武男の仲間に近づくにつれ、彼らが何をしていたのか気がいた。

……マズイッ、と思った時には、武男がクニオのそばまで来ていた。

「オーッ、分ってんだろなあ、だまってろよお」

あごをつき出して、武男が一言言うと、クニオはうなずいて、その場をいそいで離れた。

陽がいつのまにか斜めにさしだしていて、もう、夕方もまじかだ。皆は、いそいでキウリを腹におさめ、もと来たお宮の方へ歩きだした。

「おそいねえ、どこ、ほつつき歩ってきたんだねえ」

土間の物音で、武男の帰りに気づいた母は、ちよつと声をかけただけで、又、夕飯の仕度にとりかかった。

……あーあ、俺は誰に似てんだべなあ……鴨居カモイの上の父の写真を見ながら、武男は、ぶつきらぼうにつぶやいた。台所で忙しく働いている母のうしろ姿は、小さくして、頭の形まで自分と違うのを認めた。

……オヤジはでかかったっていうけど、顔はあんまり、俺に似てねえなあ……

……一度でいいから、オヤジの生きてる顔が思いうかべればいいんだけどなあ

……

武男が畳にねころんで食事を待っている時、とつぜん、クニオの母がとびこんできた。「オメのさしずだべ、うちの子をなぶりものにしやがったのはー、どうしてくれるー」両手にコブシをにぎり、ワナワナふるえていて、髪もみだれている。クニオは、あれ

から、誰か武男の仲間になぐられたようだ。

母が腰を地に着くほど曲げて、クエオの母にあやまっているスキに、武男は家をとび出した。夕方のうす暗い道を、懸命に走った。

ハア ハア、ハアと、息を切って走りつづけ、ようやく足を止めたのは、杉の木が二本高くそびえる寺の山門の前だった。呼吸がおちついてから、武男は門をくぐった。奥の本堂は、陽が落ちたばかりの夕空を背に、ただ黒いかたまりにしか見えない。

「オイ、武男じゃねえか、なに暗がりですつたってる」

ふいに、うしろから年よりの声がした。

「あー、吉羽<sup>ヨシバ</sup>のじいちゃん、……じいちゃん、俺は何んでオヤジの顔が思いうかばねえんだあ、なんで、そんなして生れたんだべえ」

「つまんねえこと考えんな、おめえはそれでも、平気で生きてけるように生まれたんだべえ、早くけえれや、真暗になんどお」

二つの影が、寺の門をあとにするころ、あたりの草むらでは、夏の虫たちがさわがしく鳴きだした。

◇◇◇好評の新刊◇◇◇

# 教訓仏教語辞典

栗田順一編 価格一六〇〇円

○仏の教えはいつも新しい！

日常用語として使っている仏教語も、その意味をよく理解してみると、私たちの暮らしに密着した教えが多い。本書はなじみ深い仏教語の意味を生活に密着したかたちでわかりやすく説いている。

〈出版・発行〉

東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三―七 電話(〇三)三三三三―三三三三―三七四一

\*浄土宗出版室において特価で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話(〇三)三四三六―三三五一まで。

法然上人行状絵図は  
やはり勅修であるの説（下）



河<sup>かわ</sup> 住<sup>ずみ</sup> 玄<sup>げん</sup>

（三） やはり勅修である

舜昌法印の「述懐鈔」の改鼠が発見され、道恕僧正の「目録」、忍微和尚の「縁起」の信憑性が否定されて、御伝の勅修説はふかい疑問の雲におおわした。事実

自分も一時、疑問に思った一人である。しかし幸いに御伝の勅修を保証してくれる資料のあることに気付いた。それは「法然上人伝記九卷」（略称 九卷伝）の存在である。この書は江戸の元禄期に発見された。撰者名がないのでとかく沙汰さ

れたが、その記事・内容が御伝に近似しているので、舜昌法印が法然上人に帰依して、最初に編集し、御伝の稿本となったものであるということにはほぼ認定されている。単行本はないが、浄土宗全書一七・望月信亨編の法然上人全集・井川定慶編の法然上人伝全集に収録されている。この九卷伝と比較することによって、御伝の勅修であることが確認されるというのである。

以下順を追って、比較確認を試みる。

(一) 九卷伝はすべて一一〇段(内一〇五段、御伝と一致) 御伝は二三七段(内一二四段、九卷伝と一致) 御伝は半数以上九卷伝に

よっているが、真偽未詳や直接法然上人と関係のない記事は削除している。その選択は舜昌以外の学識ある人によってなされたと思われる。

(二) 九卷伝の文章は粗撰で、引用資料も原文のままであるが御伝は優雅で、漢文の資料は和語に訳されている。その修辭は朝廷の儒官丁臣によらなければ、舜昌法印では出来ないと思われる。

(三) 御伝第九卷の後白河法皇の如法經の記事、第十二卷の諸公卿の念仏帰依の記事、これらは朝廷の事情に精通している人でなければ書けないと思われる。

(四) 御伝卷二九・四段の一念義停止の記

事は、九卷伝六下・11段の「一念義停止事」によっている。その中で九卷伝に

爰に上人配国の後、成覚房の弟子善心房といえる僧、越後国にして専らこの一念義を立てけるを

とある部分を、御伝では簡単に「成覚房の弟子等、越後国にして一念義を立てけるを」と書いて「善心房」の名を伏せてある。想うに「善心房」は親鸞聖人の初名の「善信」の訛字であろう。

従ってこの記事は一向宗本願寺門徒にとつて決して快いものではない。むしろ抹削してしまいたいであろう。そこで御伝においては、朝廷の一視同仁の

御配慮によつてこの部分を簡略化したものと推察したてまつる。

(五) 九卷伝は舜昌法印個人の、しかも初期の編述のため全体に雑然としていかにも草稿本である。御伝は文章が洗練されて優雅であり、記事も井然と順序立っており、この辺にもさすが勅修なればこそと思われる。

以上の理由によつて、一時御伝の勅修説を疑った自分もやはり勅修であると考へなおすに至った。

それでは舜昌自撰の「述懐鈔」に「勅命ヲウケ」の文字のないのは如何にというに、当時山門の衆徒の非難は、舜

昌が法然上人に帰依し、念仏に転向してまず九卷伝の編述に取りかかったのに対してなされた。その釈明記録と解する。

聞證の談話、道恕の鑑定は恐らく義山の虚構擬作であろう。それに基づいて書かれた感激の縁起も、今となつては信用できない。これらはすべて江戸幕府・徳川將軍の浄土宗保護政策の結果の産物である。

御伝の勅修説は一時の現象であつたとしても、九卷傳と比較して読めばやはり勅修である事實は認めざるを得ないのであろう。(了)

## 竹中信常著

# 佛心凡情

(ポケット版イラスト入り二四八頁)

佛さまの心で現代の世相を思い、これを凡人のわれわれに分りやすく説いた文集。法話の材料または施本として御利用下さい。

定価五〇〇円 送料二一〇円

《発行・発売》

大 道 社

電話(〇三)三三六二一五九四四

振替(東京)一八二四七

季語やぶにらみ (三)

平成4年、自然界の異変

紫陽花に秋冷いたる信濃かな

杉田久女の名吟である。南国育ちの久女が、

夫の生地信濃で詠んだ句であるから、紫陽花と秋冷の取り合わせは、新鮮であり、驚きで

もあつたのであろう。いろいろな歳時記で、

木きの

下した

隆りゅう

一いち

(随筆家)

この句は紫陽花の例句に採られていたり、秋冷の例句になつていたりする。主季語を何にするかは歳時記の編者の感性によるが、両方の季語の例句に挙げている歳時記もある。無責任といえは無責任だが、案外この編者が一

番正直者かも知れない。それほど難解な句であるとも言える。お前ならどちらを取ると聞かれれば、私は躊躇なく紫陽花を取るが、常々この句には疑念を抱いていた。

梅雨の頃盛りを迎える紫陽花が、そんなに遅くまで咲き盛っているだろうか。ただ、紫陽花は平均気温が一七度を越えると咲き始めるというから、信濃のような高地では平地に比べると開花時期が遅くなる分だけ後まで咲いているのかなと考えなくても良かったが、秋冷いたる頃には茶褐色のドライフラワーになっっている我が家の庭の紫陽花を見るたびに、疑念は年々深まるばかりであった。

ところがである。我が家の白紫陽花の一株が、何を勘違いしたのか、九月半ばになって突然開花したのである。蕾が出来る梅雨の前

に暑い日が続いたためか、今年伊豆地方の紫陽花はいずれも花の付きが悪かった。この株も三つ四つ小さい糺をつけて終わり、汚らしいので、そろそろ根元から伐らねばと思っていた矢先のことである。

「梅雨の間も雨が少なかったし、……傘をさして外に出た記憶がないものね。そんなせいかな」

色のさえない花を眺めながら娘に言うと、「あら、そんなことなかったわよ。結構降りました。雨が降った日、外に出なかっただけじゃない」

と、にべもなかったが、

「夏が涼しくて、立秋の後から真夏日が続いたりしたから、錯覚したのね、きっと。それにしても、なぜこの株だけ咲いたのかしら」

と首をかしげた。

「この株だけ日当たりのいい所に生えているからかも知れんぞ」

それでも答える他に、私には原因らしきものを探し出すことは不可能だった。

この紫陽花、秋冷の季節を過ぎても咲き続け、さすがに花は幾分小さくなったが、いまだに次々と蕾を付けている。この蕾が咲くかどうかは保証の限りではないが、伐る時期を逸してしまったことだけは確かである。

今年、私の周りで起こった自然界の異変はこれだけではなかった。

五月一九日の夕方、伊豆に来て一五年になるが、初めて郭公の啼き声を聞いたのである。

「ワァー、『カッコーワルツ』のレコードと

おんなじ声だ！」

娘の所へ英語の勉強に来ていた女子中学生が奇声を発したが、この子も初めて耳する郭公の声だったようだ。月日が流れても同じような発想をするもんだと、私はおかしかった。実は私も初めて郭公を聞いた時、そう思ったのである。

恐らく、この鳥は行き場所を間違えたはぐれ鳥だったのであろう。一時間ほどばたばた飛び廻って啼いていたが、いつの間にかいなくなってしまった。棲みついてくれれば、ひと夏啼き声を楽しめたものと惜しい気がしないでもなかったが、時ならぬ郭公の出現と中学生の奇声が、図らずも久し振りに私を中学生時代の私に引き戻してくれたのであった。  
（あれは中学二年の時だから、昭和二〇年の

五月の終わり近くだった

どうしてこうも鮮明に覚えているかという  
と、六月に入ると滑空訓練の合宿に出掛ける  
ため、その前に寸暇を惜んで開禁前の川で人  
目を憚りながら鮎を釣っていた時だったから  
である。郭公は一・五軒ほど上流の、枯れ木  
の上で啼いていた。視力二・〇の目をして  
も鳥の姿は点にしが見えなかったが、声はよく  
聞こえた。もう少し大きな鳥かと想像してい  
たが案外小さいんだな。それにしてもよく通  
る声だなというのが、その時の偽らざる感想  
である。そして、「郭公ワルツ」の郭公の声  
は本物だったんだなと思ったのである。

この曲が何処の国の何という人の作曲で、  
音楽史上でどの程度の評価をされているもの  
なのか全く関知しなかったが、「これは世界

的名曲である」という評価を私は下した。今  
もこの判断は変わっていない。分かり易くて  
いいじゃないかというのが、その判断理由な  
のである。

初蟬を聞いたのは、七月五日の夕方だった。  
例年通り蛸であった。去年よりやや遅かった  
かと思うが、異変というほど遅れてはいなか  
った。ただ、元気がないのと、一匹だけとい  
うのが、後に来る気候の異変の予兆のような  
気がしてならなかった。

七月二〇日梅雨が明け、暑さが本格化する  
につれて、油蟬、ミンミン蟬、熊蟬、ツクツ  
ク法師の順で夏を彩る主役は次々に登場した  
が、その数は極めて少なかった。女房がその  
ことを口にしたので、

「煩くなくていいじゃないか」

と言つてみたものの、やはり淋しい。

「蟬しぐれという季語は、ここではもう死語になつてしまつたのかなあ」

と言うと、女房は、

「しぐれつて、そんなに激しい降り方をしないのに、蟬しぐれ、虫時雨と激しい鳴き方の喩えに使われるのはなぜでしょうね」

と、疑問を投げかけて来た。私は物ごころついた時からというのは大袈裟だが、時雨は静かに降るものだと思つていたから、女房の疑問は虚を突かれた思ひだつた。これは一つ調べてみる必要があるなと感じて、早速二、三の書物に当たつてみた。考えてみれば時雨を辞書で引いたこともなかったし、歳時記でも作例の句を参考にするぐらいの読み方しかしていなかったから、私にとつては画期的な

出来事だつた。

辞書類の記述はどれも似たりよつたりなので、代表として「広辞苑」のものを挙げると、しぐれ〔時雨〕（「過ぐる」から出た語で、通り雨の意）

①秋の末から冬の初め頃に降つたりやんだりする雨。（季・冬）

②比喩的に、涙を流すこと。「袖の——」

③一しきり続くもののたとえ。「蟬——」

（以下略）

と、記述は極めて素っ気ない。「通り雨」といっても、これは編者新村出の唱えた説に過ぎない。大体時雨という概念は父祖伝来のもので、説明するとすれば辞書ではこの程度が限界かも知れない。しかし、これでは時雨発生のメカニズムは全く解明されていない。

あまり期待しないで「日本大歳時記」を開くと、意外や意外、かなりのスペースを割いて山本健吉の解説が載っていた。

——北風が強く吹き、連峰の山々にあたつて降雨を起こした残りの水蒸気が、風に送られて山越えして来る時降らす急雨で、降る範囲は非常に狭い。主として初冬を時雨の季節とし、陰暦一〇月を時雨月という。

山地に多く、ことに京都のような地形のところに多い。「山めぐり」とも言う。(中略)

川音・松風・木の葉などを時雨の音と聞きなして、川音かわとの時雨・松風の時雨・木の葉の時雨などと言ひ、涙のしじに濡るるさまを涙の時雨・袖の時雨などと言ひ、これらを「似物にせの時雨」と言つて、やはり季を持たせてある。(後略)

さらに大後美保編の「季語辞典」によれば、

——晩秋や冬に急にばらばらと降る小雨を時雨という。曇つて降ることもあれば、晴れている時に降ることもある。冬の季節風の吹き出す時によく見られる。山を乗り越えてきた強い風が雨を運んできたり、局部的な前線のために降る。従つて、時雨が降る時には強い風を伴うことが多く、長続きしない。(どうも両書の記述によれば、時雨は音して降るもののような。確か、川端康成の「伊豆の踊り子」の冒頭は時雨の景だったが……)

おぼろげな記憶を頼りに、書架の隅から引っ張り出してみると、

——道がつづら折りになつて、いよいよ天城峠に近づいたと思うころ、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すざまじい速さでふもと

から私を追ってきた。(後略)

「すざすじい速さか。やはり時雨は音して降るものなのかなあ。この時雨は風が連れてきたものであるが、我々が日照雨とかそばえと呼んでいる時雨に果たして音があつただろうか」

そう思つて、キラキラ光りながら過ぎて行く通り雨を睨み浮かべてみたが、私の耳には雨の音は聞こえて来なかつた。

「やはり、時雨は静かな雨なのだ。では、何が俺に時雨は静かに降る雨というイメージを与えたのであろうか」

これといつて思い当たる節はなかつた。

暇つぶしにテレビをつけると、丁度素人のど自慢の番組をやっていた。出場者のマイクの使い方が格段にうまくなったのは、多分空

オケのせいなんだろうななどと思つてゐるうちに、何人目かに中年の男性が出てきて、「○番、さんさ時雨」と名乗りを上げた。それを聞いた途端、私はアツと思つた。

「これだ。この唄が俺に静かな雨のイメージを植え付けたんだ！」

「さんさ時雨か 萱野の雨か

音もせで来て 濡れかかる

シヨンガйна

まるまる一節歌わして、鐘は二つであつた。会場の笑いを取るためには、ここまで引つ張るのが、演者には酷だが演出の常道なのである。肩を怒らせて退場する男性の後ろ姿に向かつて、私は「有難う」と呟いた。

十一月の半ばを過ぎて、まだ伊豆を訪れた時雨はない。これも異変の一つであらうか。

## ◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌「浄土」を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努めています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、「浄土」誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。が、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六―十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

### 「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円  
(送料不要)

浄土 五十八巻 十二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成四年十一月二十五日 印刷

平成四年十二月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 (株)小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三三六)五九四四

〒二二(振替)東京八―八二―八七

《全国学校図書館協議会選定図書》

ことわざで読む仏教文化の華！

だれもが知っていることわざからの仏教入門の手引

# 仏教ことわざ辞典

勝崎 裕彦 著

■読みやすい愛蔵版——定価8000円(税込)

A5判・上製クロス装・函入

本文約300ページ 10ポイント2段組

●挨拶の冒頭、法話の導入部に、文書布教にと、さまざまに活用できる座右の書。

●視力の衰えた中高年の方におすすめします。

■ハンディな携帯版——定価2500円(税込)

四六判・上製カバー装

本文約300ページ 9ポイント2段組

●日本の伝統文化を知りたい人々に、また寺院から檀信徒への施本に最適。

●一家に一冊、常備の書。

発行 渓水社 千一〇三(三八一四)九六三一(振東京七三三六六五)

発売 北辰堂 千一〇三(三八一四)八四九四(振東京九一四三二四二)